

石川達三

約束された世界
解放された世界

石川達三

約束された世界・解放された世界

新潮社版

約束された世界
解放された世界

石川達三作品集第二十一卷

昭和四十八年十月二十日印刷
昭和四十八年十月二十五日発行

定価 六〇〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話東京〇三(80)一一一一

振替東京八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

装画 下田義寛

目 次

約束された世界

5

解放された世界

209

解 題

久保田正文

413

約束された世界
解放された世界

約束された世界

二つの約束

私は窓に顔を押つけて車輪を見ていた。車輪は非常な早さで回転しているので、白くなって見えた。回転しながら、苦しがつて悲鳴をあげているようだった。滑走路は滝のような縞しまになってうしろに流れていた。流れが早いために土の量感が消えて、幅のひろい布のようだった。そして車輪が浮いた。滑走路が下にはなれて行くのを私は見つめていた。

私は空中に浮いたのだ。そんな馬鹿なことがあるだろうか。……しかし私は疑わない。たしかに私は空に浮いており、その異常な事態を素直に信じていた。眼の下がいきなり青黒い色に変わった。海に出たのだった。私は海の上の空に浮いていた。誰が私をこの空に浮ばせているのか、私は知らない。けれども私は別に不安ではなかった。誰かがこの飛行機を操縦して、空に飛ばせている。私はその人の名も知らず、顔も知らない。その人を信ずべき理由はほとんど無かった。

私はその人を信じてはいないが、拒否している訳でもなかった。私はただ非常に漠然と、飛行機というものを信じていた。そして飛行機を操縦している人のことは考えていなかった。私ばかりでなく、五十何人の乗客の誰ひとりとして、考えていなかった。考えなくてもいい。考える必要はない。そういう漠然とした感覚だった。何もかも漠然としたままで、私たちはこの飛行機に命を托していた。それは私の怠惰であり、彼等の怠惰だった。私は危険についてほとんど無感覚になっていた。

飛行機は旋回し、空が上の方に消えた。窓の外は一面の海だった。私の前の座席には新婚旅行の二人がいた。花嫁が外を見ながら、すこしうわずった声で言った。「あら怖い。大丈夫かしら。……でも素晴らしいわね。良い気持」

彼女は不安と快感と、矛盾した二つの感覚を同時に感じながら、興奮しているらしかった。結婚そのものが彼等にとつて、不安と幸福感との矛盾した感覚であつたに違いない。彼女はいま同時に二つの矛盾を感じていたのだ。一つは男から受けるもの。もうひとつは飛行機から受けるもの。その二つの性質が、よく似ていた。そして二つとも、一種の賭だった。

彼等は昨日か今日か、あたらしく結びついたばかりだ

った。一つの小さな社会が誕生したのだ。この社会が、(人生)をつくる。人間の社会は結合と分離とのくり返した。私はひとりの女と別れて来たところだった。結合した二人はただ漠然と充実した気持ちになっているが、分離して来た私は漠然とした孤独を感じていた。それは漠然とした孤独であり、(孤独感)にすぎなかった。本当の孤独などは有ろう筈もない。人間の社会が私をがんじがらめに縛りつけていた。死だけが社会の終りだ。生きて

いる限り、どれほど私が社会を忌避しようとも、忌避すること自体が、私に対する社会の拘束を強めるのに役立つばかりだった。新婚の二人は、あたらしく人間と人間との関係を結び、それを深めようとしている。それは一つの約束を信じるということだった。しかし約束とは何であり、それを信じるとは何であるのか。……私は新婚の二人を憐れむ気持ちになっていた。幸福だけが単独に約束されることはない。それと同時に不幸も約束されているのだ。結婚とは彼等に、その二つを同時に約束するものであったに違いない。

飛行機はますます上昇し、海面はさらに遠く下って行った。そして私の孤独感もふかまった。私は二千メートルの空の上を飛んでいた。しかし、人間が空を飛ぶという奇蹟的な行為について、私自身は何の努力をもしては

いなかった。私はただかねを払って切符を買っただけであった。空を飛ぶ奇蹟は操縦士がやっていた。それは私たちの間の約束だった。しかし私は彼を知らない。彼も私を知らない。

私と約束を結んだのは、飛行機会社の事務員であった。そして飛行機会社は操縦士を雇い、彼と約束をしていた。私と操縦士との約束は間接的であり、三者は三角関係になっていた。彼は会社に対して責任をもち、会社は私に対して責任をもつ。私はかねを払って彼等の責任を買って取っていたのだ。しかし本当はもっと複雑であった。おそらくは何百人という人たちが責任を分担しながら、一台の飛行機を飛ばせるのだ。飛行機製作会社、整備士、機関士、通信士、検査員、コントロール・タワー等々。私はそのような無数の約束に支えられて、二千メートルの空を飛ぶという奇蹟を実現しているのだった。無数の約束——それが人間の社会だった。

紺色のスーツを着たスチュワーデスが、乗客に紅茶を持って来た。この最も平凡な飲みものを、私はふと珍しいもののように思った。紅茶もまた紙製のコップとともに、二千メートルの空を飛んでいたのだ。私はそれを含みながら、窓から外の遠い景色をながめ、そして心は平静だった。

私は自分が危険な位置にいることを、ほとんど忘れていた。操縦士に対する私の信頼はあやふやであった。彼は私にとって赤の他人だった。しかし飛行機が飛んでいるあいだは、私と彼とは緊密な関係で結ばれていた。いわば生死を共にしているのだ。けれども飛行機が目的地に着いてしまえば、もう私は彼に何の用もない。したがって乗客の操縦士に対する信頼感は、一種のエゴイズムの色を帯びたものであって、本当の信頼ではなかった。私は自分の信頼が本ものでないということに、漠然とした不安を感じていた。私と彼とは生死を共にしておりながら、私たちのあいだに人間関係というべきものは、何もなかった。

操縦士の側から言えば、彼が飛行機をとばしているのは生活手段だった。彼は会社に対して義務を負っており、会社は旅費を受けとった乗客に対して義務を負うていた。そして私が命を托しているのは会社ではなくて、操縦士の方だった。義務が三角関係になっていた。けれどもこの三者のあいだに、人間関係と呼ぶべきものはどこにも無かった。私は幾つかの義務に支えられて、空を飛んでいた。

しかしそれは不思議なことではなくて、最も平凡なことだった。それが社会の約束であった。無数の約束が、

無線電信の細長いポールをたくさん針金が支えているように、私を八方から支えていた。人間同志の約束、社会と社会との約束、無限に複雑な約束の網目によって私は支えられていた。この約束の支えが私の自由であり、同時に私を拘束するものだった。約束が同時に二つの矛盾した機能を果していた。

前の座席にいる新婚の二人は、肩を寄せあって小声でささやきあっていた。単純な幸福が彼等を充たしている。しかし彼等が幸福であることの確実な証拠はない。いわば幸福感という風なあさはかな感情にすぎないのだ。その幸福のかげで、彼等に約束された不幸も徐々に育っている。彼等がまだそれに気がついていないだけのことだ。三方月ののち、半歳ののちに、彼等は自分の幸福からの裏切りを感じるだろう。二つの矛盾したものが、同時に約束される。私はいま女と別れてきた。別れは苦痛であり、同時に私にとってはひとつの解放でもあった。

社会は矛盾にみちており、私は矛盾の中でしか生きられない。したがって人間関係とは本質的に矛盾であり、社会の約束は相互に裏切りつづけているのだ。私は職業によって支えられ、職業によって拘束される。私は自分が造った家庭によって支えられ、家庭によってたくさん自由を失っている。

私は小さな庭に花の種を植えた。太陽と雨とがこの種を育ててくれた。太陽と雨と、その二つの矛盾したものがひとつの調和を保ち得たときに、草は育ち、そこに花を咲かせるのだった。私の妻はみどり、そして彼女の子供を産んだ。出産は彼女にとって最大の喜びであり、彼女自身のための最大の発展であり、それが同時に彼女の生命の危機だった。

「あら、大きな島よ」と、前の座席の若い花嫁が言った。「あれ、どこかしら」

飛行機は三千メートルの高さだった。花嫁が身を乗り出して窓から下を見た。そして、

「淡路島だろう。うん、淡路島」と言った。

私もさそわれてのぞいて見た。この花嫁は日本の地理を知らないことを暴露していた。淡路島の輪郭さえも知らないのだ。

「ああそう。これが淡路島ね。あの、千島が通う島でしょう」と花嫁が言った。

彼女は新婚旅行の空の旅で見たあの島を、生涯淡路島だと思っているに違いない。私は彼等の軽薄な会話をこっそり嗤^{わら}っていた。眼の下の海面に浮んで見えていたのは、小豆島だった。

しかしそんな事はどっちだっていいのだ。彼等が小豆

島を淡路島と思い込んでしまっても、それは彼等の社会にも、社会の基本をなす人間関係にも、何の影響をもあたえはしない。彼等は（千島が通う）と昔の歌に歌われた淡路島をはじめて見たことの喜びを感じている。その喜びの方を大切にすることがいい。まちがった認識の上にも喜びは有り得るのだ。むしろほとんどすべての喜びは、まちがった認識の上でのみ育つのかも知れない。

昨日、私たちは静かなホテルの部屋で二人きりの夜をすごした。私たちは別れを悲しんではいたけれども、別れを中止するつもりはなかった。したがってその悲しみは、悲しい遊びのようであった。彼女は私と別れて良人の家に帰るつもりであったし、私は私の妻のところへ帰る予定だった。それは三年もまえから予定されていたことだった。三年まえに私たちが始めて関係をもった時から、今日の別れは約束されていた。一つの行為が二つの矛盾した約束を含んでいたのだ。

「あなたって、本当は冷たい人なのね。あなたは平気な顔をして、さよならが言えるのね」

平凡な恨みごとだった。そしてその言葉には女のエゴイズムが一杯含まれていた。もう中年になるというのに、少女のようなあどけない顔をしていた。そのあどけなさは、悍^{はげ}徳^{とく}について何の感覚をも持たない幼稚さであった

かも知れない。彼女は泣いていた。そのくせ彼女自身も別れる気になっていたのだ。私たちの関係は三年もつづいてきたが、やはりかりそめの関係だった。彼女自身は真実な愛情であつたと言いかも知れない。しかしそれが私に対して真実なものであつたとすれば、そのとき彼女は良人を裏切っていた。一つの行為が真実と虚偽と、矛盾した二つの作用をもっていたのだ。

私たちの間には経済的な関係はなにも無かつた。したがって純粹な愛と性との関係であり、單純な男女関係であつた。純粹ではあるけれども、けだものの雌雄の関係のように單純であり、本能的であつた。彼女とその良人とのあいだには、経済関係がからんでゐる。したがって不純であるとも言ひ得る。不純であるからこそ彼女は良人から離れ得ないのだ。私たちの関係は單純であつたために、別れさえも單純であつた。

「もう会えないのね。これつきりなのね。ほんとに私たち、他人になつてしまふのね」

他人になるのは何でもないことだつた。もともと赤の他人であつたのだ。彼女は泣きながら私を求め、狂おしく肌をすり寄せてきた。今から永遠に別れるという時になつて、さらに肉体を求めるといふことは人間の未練にすぎなかつた。あらゆる生物のなかで、人間だけが持つ

ている（未練）という感情であつた。この行為は何を意味するのか。もとより生殖を目的とするものではない。心と心との関係を深めようとするものでもない。私の前の座席にすわつてゐる新婚の夫婦にあつては、その行為は二人の人間関係を無限にふかめて行こうとする貪慾な要求であり、そして生殖の目的をも含んでゐるに違いない。しかし私と彼女との昨夜の行為は、ただひと筋な未練の心からであつた。未練であると同時に、別れの区切りをつけるための行為でもあつた。一つの行為が、ここでは継続への希望と断絶への決意と、分裂した二つの願いをこめたものであつた。

今朝、私たちは向きあつて靜かに食事をした。明るく晴れた美しい朝だつた。その明るさに、私は自分を恥じていた。二人とも何も言わなかつた。言うべきことは言いつくしたという氣持だつた。しかし本当はその時から、もう他人になつてゐたのだ。私は他人になつた心で彼女を見ていた。私たちのあいだに在つた関係は、何であつたらうか。私たちを別れさせたものは、どのような力であつたらうか。

それは社会であつたかも知れない。社会の約束が私たちを引きはなした。私は出発の支度をした。私たちは三年の永いあいだ、愛しあつてゐた筈だつた。その愛情が

にせものであつたのか。それとも私たちを引き離す外部の力が強かつたのか。女は鏡台の前で化粧をしていた。

私は煙草をすいながら、化粧が終るのを待っていた。女は何も言わなかつた。すでにその時から、私に對して他人の心になつていたようであつた。その事はわずか十分に証明された。

私たちはホテルを出て、駅の方へ歩いて行つた。道はやがて商店街にはいつた。彼女は不意に私を待たせておいて、小さな本屋の店へはいつて行つた。そこで彼女は少年のための雑誌を二冊買つて、店員に包ませた。

「子供に、買つてやる約束をして、忘れていたの。ちょうど良かったわ」と彼女は言つた。

私はそれを聞いたとき、過去三年にわたる私たちの關係が砂の塔のように崩れて行く思いがした。この女はもと赤の他人であり、いまもまた他人であり、三年を通じて他人以外のものであつたことは一度もないのだと思つた。私ははげしい失望を感じ、同時に完全にこの女から自由になつた自分を感じた。彼女の小さな一つの行為が、私にとって失望と解放と、矛盾した二つの作用をしたのだつた。

いまになつてふり返つて見ると、私たちのあいだには本當の人間關係というものは何もなかつたようであつた。

すべて偽りの關係であつたかも知れない。そして常に共犯者であつた。共犯者たちの最大のモラルは、相互に共犯者であることを極秘にするという密約であつた。ひと月ほど前に、私は銀座の街で偶然に彼女に會つた。良人と二人連れだつた。背丈の高い、立派な体格をした彼女の良人は、晴れやかな調子で私を呼び止めた。

「やあ今晚は。お元氣ですか。実はいまからね、蕎麦をたべに行くところなんです。どうです、ちょっと行きませんか。すぐそこです。こりゃあうまい蕎麦ですよ」

すると彼女もまた明るい口調で言つた。
「参りましょうよ。ほんとにうれしいの。だまされたとお思ひになつて、ちょっと参りましょう。多勢の方がおいしいわ」

彼女の本心は、私を避けたかつたかも知れない。しかし見事な演技だつた。良人はこの妻を疑う一片の手がかりをも掴み得なかつただろう。私はこの瞞された良人の明るい顔を見た。幸福な表情だつた。まちがつた認識の上にも幸福は成り立つのだ。彼は白毛のまじつた短い髭を生やし、太い縁の眼鏡をかけていた。どこかの役所の高級官吏だつた。

私は彼等の誘いを受けることにした。強いて辞退すれば、却つて怪しまれるかも知れない。彼等と同行すること

とよつて私は身の潔白を証明しようと考えていた。それ自体が彼に対する裏切りであり、二重の裏切りであった。私は彼の妻とともに演技をしなければならなかった。

私たちは蕎麦屋へゆき、一本の酒を飲み、談笑しながら蕎麦をたべた。この夜、私と彼の妻とは完全な共犯者であり、彼は快活なピエロであった。おそらく彼女はこの共犯関係によつて自信を加え、私たちの関係が今後も永くつづけられるものと期待していたことであらう。彼女は良人の横に坐つていたとき、まことに可愛らしい妻であり、良人の溺愛にひたり切っている子供っぽい世間知らずな妻のようであった。その欺瞞の見事さが、私を失望させた。欺瞞というよりは、むしろその方が彼女の真実であつたに違いない。彼女にとつて私の存在は、結局のところ何でもなかったのだ。裏切られていたのは私であつたかも知れない。彼女の美しくあどけない顔を、私はばけものを見るような気持ちでながめていた。彼女は二つの顔をもつていた。二つとも真実であつたのか、二つとも虚偽であつたのか。私は私たちの秘密な関係が、底知れぬほどに虚しいものに思われた。私はそのとき、この女との別れを決意した。……

飛行機は高度を下げていた。夕陽を浴びた明るい市街地が眼の下にちかづいて来た。スチュワードスは着陸に

そなえて、座席のベルトをしめるようにとアナウンスしでから、さらに客席をずっと見てまわつた。

私の席と反対の窓ぎわに、二十七、八と見える洋装の女がいた。彼女は窓に頭をもたせかけて眠つていた。黒の服に青い石の耳飾りをつけて、小さな黒い帽子をかぶつていた。裕福な家庭の若い夫人という姿だつた。しかしどこことなく疲れた顔をした女だつた。

客席を廻つて来たスチュワードスは、この女客の肩にちよつと指を触れて、言つた。

「すみません。ベルトをおしめになつて下さいませ」

女は答えなかつた。彼女への注意が二度も三度もくり返された。

「もしもし、お客さま。おやすみのところを済みませんが、ベルトを……」

女の中から傾き、頭が力なく垂れさがつた。スチュワードスはおどろいて、彼女を抱き起そうとした。女からは座席の上に倒れかかり、ハンドバッグが膝から床に落ちた。私ははなれた位置からそれを見ていた。人々がふりかえり、スチュワードスは緊張した表情で立ちあがつた。飛行機は翼をかたむけて市街の上を旋回していた。医者を探したが、乗客のなかに医者は居なかつた。前の操縦席から副操縦士がやつて来て、女客の脈をしらべ

た。私はベルトをしめたまま座席に坐っていた。女は死んでいると、私は思っていた。みんなは急病だと考えていたが、私はそれを自殺と見ていた。自殺の理由は知らないが、さっきスチュワーデスが紅茶を配ってきたとき、あの女はその紅茶で何か薬のようなものを飲んだ。それを見ていたのは、多分私ひとりだった。

「脈は有るかね」と、私のうしろの席で男の声があった。副操縦士は金モールの飾りのついた制服を着ていた。彼は立ちあがり、声のした方を吃と見たが、何も答えなかった。そして急ぎ足で前部の操縦席にかえって行った。

空港の方に救護の手配を求めるのであらうと、私は思った。飛行機が振動するたびに、座席から垂れさがっている女の白い手が揺れた。命のない物の揺れ方だった。薬指にプラチナの結婚指環がはまっていた。彼女は結婚したとき、どれほどの喜びにみちて、この指環を受け取ったことであらうか。しかし幸福だけが単独に約束されることはない。彼女の今日の悲劇もまた、この指環とともに彼女に約束されていたのだ。

私の前の座席に並んでいる新婚の夫婦は、肩を寄せあつてその女を見ていた。スチュワーデスが女の軀の上に灰色の小さな毛布をかけた。

「いや、ねえ……」と、若い花嫁は新婚の良人にささや

いた。

それは単純な嫌悪の感情にすぎなかった。彼女はこの眼の前でおこった悲劇を、自分には関係のない他人のことだと思っていたのだ。彼女の現在の幸福は、まだ崩れはしない。しかし彼等二人の関係、男と女との関係が、いまのままで済む筈はなかった。彼女はそのことに気がついてはいない。まちがった認識に支えられて、彼女は幸福だった。彼女はいまでもまだ、小豆島を淡路島だと思っていたに違いない。

翼の下の蓋がひらき、油で光った銀色の脚が垂れさがった。その脚はむなしく空をすべっていた。私は窓に顔を押つけて車輪を見ていた。車輪の下に滑走路がはいり、その二つの距離がせまってきて、小さな土煙をあげて接地するとともに、眼にもとまらぬ早さで車輪が回転するのを見た。私たちは人間の社会の中に降りたのだ。しかし自殺したこの女にもはや社会はなく、彼女をとりまいていたすべての約束は失われていた。自殺は彼女にとって最後の悲劇であり、そして最後の解放であった。

エンジンが止り、タラップが引き寄せられ、扉がひらくと、白衣を着た医者が最初にはいつて来た。彼は女の臉を押しひらき、懐中電燈の光をあてて眼の中をのぞき込んだ。瞳孔はむなしく開き、彼女の眼は何も見えてはい